

女性誌における男性の客体化

〈パーツ嗜好〉という観点から

斎藤 沙莉

1、序論——〈見られる女性〉から〈見る女性〉へ

歴史において、女性は長らく男性に〈見られる〉客体として扱われてきた。例えば、西洋においては特に一八世紀以降の美術において女性の裸体やプライヴェート空間での姿が描かれるようになり、女性は男性に鑑賞の対象として扱われてきた。ピーター・ブルックスは、近代（一八世紀）までに、「女性の裸体は、明確に男性がするものと見なされた鑑賞の官能的な対象として十分に確立されており、裸体の表象は、（中略）人目を気にせずにくつろいでいるところを見られるというふうに、ますますプライヴァシーの侵害の様相を帯びるようになっていった」⁽¹⁾と述べている。また、ローラ・マルヴィは映画の中における女性の表象の特徴について論じる際に、こう述べている。「見るという行為の快楽は能動的男性、受動的な女性に分割されている。決定的要因をもつ男性の視線（ゲイズ）はその幻想を女性の姿に投影するが、うまくできたもので女性の姿はその視線に見合うようなスタイルをとる」⁽²⁾。彼女は、見る立場は男性、見られる立場は女性に割り当

てられており、男性は女性に理想の女性の姿を投影し、女性はその視線に応えるように振る舞うのだと述べる。

こうした状況は何も西洋だけではなく、日本でも続いてきた。池田忍は、近代以降に西洋の規範が日本へ流入して、女性を自然と同位置に位置づけてまなざしの客体として扱う傾向が強まったことを説明する⁽³⁾。池田は、院政期に描かれた絵巻において、男性の視点が介入するからこそ女性の存在が可視化されることを例に取り、こうしたジェンダー観が日本でも古く続いてきたことを示している⁽⁴⁾。また、成実弘至は、戦後日本においても女性身体が見られる対象として差し出されたことを指摘している⁽⁵⁾。このように女性は日本においても歴史的に男性に〈見られる〉客体として扱われてきたのである。

しかし、伊藤公雄が述べるように、日本においては1970年代以降の女性の社会進出の影響もあり、80年代以降には女性に対して主導権を取るべきだというような伝統的な〈男らしさ〉の崩壊が進み、他者からの「外的視線」を重視し、女性に逆らえない従属的な男性の増加などが起きた⁽⁶⁾。また、千葉雅也は、90年代以降、特に2000年代の日本の（主に異性愛の）男性は、「容姿を見られ評価されることを女性に比べて弱い引き受けで済ませつつ女性の容姿を見る主体」であるという特権を剥奪され、男性が急速に「まなざしの客体」とされていったことを指摘する⁽⁷⁾。このように、以前であればまなざしの客体とされることなく女性をまなざす主体であった男性には、「見られずに見る」権利を剥奪され、〈見られる〉立場とし

(1) ブルックス『肉体作品——近代の語りにおける欲望の対象』、38頁。

(2) マルヴィ『視覚的快楽と物語映画』、131頁。

(3) 池田『日本絵画の女性像——ジェンダー美術史の視点から』、151頁。

(4) 同書、35頁。

(5) 成実『文化フェティシズムと欲望される身体』、276・277頁。

(6) 伊藤『〈男らしさ〉のゆくえ』、15頁。

(7) 千葉『イケメンであること』、8・9頁。

ての自分を意識し始めるという、意識の変化が起きていることがわかる。

以上のようなことを背景に、女性が男性にまなざしを向け、〈消費〉の対象としていふとすら言えるような状況が起きていると考えられる。井上善友は、90年代以降、男性の裸や下着姿を映し出すCMやテレビ番組が激増し、それらは女性から「イイ男を見るための観賞用」の対象として扱われたと述べる⁽⁸⁾。

そして、近年ではますます女性による男性の客体化が進んでいると考えられる。例えば、女性が好みの男性を選び取り、プロデュースしていくゲームの爆発的増加⁽⁹⁾や女性が男性の細かな愛好ポイントを語る本⁽¹⁰⁾の登場などにその一端を見ることができ。また女性向け雑誌の『JUNON』や『ViVi』『CanCam』においても、2014～2015年頃から男性芸能人を扱うページ数が増加しており、女性による男性表象の需要の増加がうかがえる。

このように、女性は一方的に〈見られる〉客体ではなく、男性にまなざしを向ける〈見る〉主体としての立場を獲得するようになり、男性を客体化し消費したいという欲望が高まってきたと考えられる。では、女性が男性を見る際のまなざしはどのような女性の欲望を示しているのだろうか。そして、女性の視線はどのような形で欲望を反映し、対象の男性へ向けられるのだろうか。本稿では、それが端的にあらわれている様相を〈パーツ嗜好〉と名付け、おもにその観点からこの問題について検討していく。

今回分析を行うにあたり対象とするのは、まなざされることを職業とし、多くの女性の視線を取り込み、欲望や願望を反映していると考えられる男性芸能人の表象である。なかでも、写真や文章、記事構成など多角的に分析

⁽⁸⁾ 井上「第4章 性差別広告」、152・153頁。

⁽⁹⁾ こうしたゲームは2010年の「うたの☆プリンスさまっ♪」登場以来少しずつ増加し、2014～5年に「あんさんぶるスターズ！」や「アイドルリッ

を行うことが出来て、辻泉が「メディアに登場する芸能人について、詳細な情報を求める熱心なファンたちのためのメディア」⁽¹¹⁾と評するように、男性芸能人の細かな情報を掲載することで女性の欲望を反映していると考えられる雑誌——特に女性向け芸能誌と女性向けファッション誌を分析の対象としたい。ひとまずここでは、近年特に男性表象が豊富に掲載されている『JUNON』『CanCam』『ViVi』を主に扱うこととする。

2、女性誌における〈身体パーツ〉写真の増加と多様化

1980～90年代の女性誌における男性芸能人の写真と2010年以降の近年の女性誌のなかの男性芸能人の写真を比較すると、〈身体〉の取り扱い方に大きな違いがあることに気づく。

・1980～90年代の女性誌における男性表象

(例①)「東山紀之『ベニス』」『JUNON』1990年1月号、21・27頁)

この記事は、1ページに多数の小さな写真が配置されているが、すべて被写体の全身または半身が映されており、引きのショットが多い。

(例②)「柳葉敏郎 上昇志向と結婚願望がせめぎ合ってたねえ」『CanCam』1989年12月号、279・283頁)

東京タワー内の柵の上で遊ぶ全身ショットや、笑顔やおどけた表情の4

シユセブン」などの人気ゲームの登場以降、増加している。

⁽¹⁰⁾ 山口ほか編『萌え男子がたり』。

⁽¹¹⁾ 辻「男性アイドル雑誌の地政学」、58頁。



連ショットが並ぶ。それらはすべて正面からの顔全体が写るショットである。

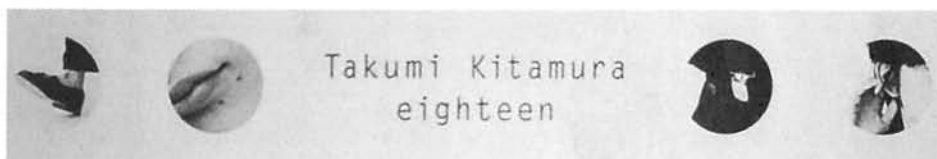
い男、NO. 1 仲村トオル」『ViVi』
1989年6月号、251、254頁)

被写体のボーリングや角度に動きはあるが、すべて顔全体と体の半身が映されている。

・2010年代の女性誌における男性
表象

〔例④〕岩田剛典ZEMながん

いる。



『CanCam』2019年7月号、157・161頁【図5】

「白シャツから覗く、美しいパーツにドキッとすること間違いなし♡」「ユースケ×上腕二頭筋 たくましい腕と浮き出た血管は、まさに男らしさの象徴！」等

写真は全身のみだが、「超特急」メンバーがそれぞれ自慢の身体パーツを強調するポーズを取っている。特に説明もなく身体の一部を「パーツ」と呼ぶ表現が用いられ、「パーツ」という表現自体がありふれたものとなってきたことがわかる。

(例⑨)「梶裕貴 ズームイン！梶くんをつくるパーツ」『JUNON』2016年2月号、76・80頁

「さあ、＼梶くんのパーツ＼を凝視しちゃってください♡」
本企画では「梶くんの耳」「目」「鼻」という言葉に合わせて、該当のパーツを虫眼鏡で拡大したような写真と本人のコメントを掲載。



【図4】(例⑦)



「超特急」メンバーがそれぞれ自慢の身体パーツを強調するポーズを取っている。特に説明もなく身体の一部を「パーツ」と呼ぶ表現が用いられ、「パーツ」という表現自体がありふれたものとなってきたことがわかる。

(例⑩)「WOODYOUNG 手フェチ必見！美しき手に酔っちゃえ♡」『JUNON』2015年4月号、16・119頁
アイドル・2PMのウヨンの(手)に関する特集。手を強調する特集。手を強

調した写

真が多く掲載されており、手に関するエピソードも語られる。「スラリとした指、しなやかで繊細な動き、

「とびきりセクシー」と女の子をキュンキュンさせる WOODYOUNG さんの手」といった表現も登場する。



【図5】(例⑧)

このように、身体(の「パーツ化」)は近年の女性誌において様々なかたちをとってあらわれており、当然のように企画の中心要素として組み込まれている。こうした変化から、近年の女性による男性の客体化における一つの傾向として、顕著な「パーツ嗜好」が挙げられるのではないかと考えられる。また、こうした記事において「パーツ」としてピックアップされる身体部分は非常に多種多様である。例えば、

(例⑪)「夏のパーツ野郎、大集合〜!」『JUNON』2011年9月号、100・104頁【図6】
こちらの例では、「ビーチで輝く腹筋」「メガネのつるが似合う耳」などが登場する。



【図6】(例①)

3、《パーツ嗜好》とフェティシズム

こうした女性誌における男性身体の《パーツ化》表象の増加がみられるなか、男性写真集の編集者である宮本和英は、写真家・蛭川実花に「女性が男性身体はどこに魅力を感じるか」を教わるなかで女性が「男を愛でる」際にパーツに重きを置いていることを実感している。また、女性がパーツに対して複雑な好みを持つことを実感し、《パーツ嗜好》について言及している。

蛭川とは二〇一一年から始まったムック写真集『月刊MEN』シリーズを

(12) 宮本「美少年写真はどこへ向かうか?」、60頁。

(13) 高旗編『恋する男子パーツ』。

一緒に制作し、(中略) その一連のシリーズは、それまでのカッコいい男性像というより、女性が見たい男のセクシーな「部分」が全体を貫くテーマになっていた。女性は男性の身体はどこに魅力を感じるのかを、蛭川自身、詳細かつ具体的に究めていて、腕の血管とか、指の太さとか、顎ではなくエラのラインとか、私としては聞くも初めて、男が女性の乳房やお尻や脚など単純な部位に惹かれるのに比べて、女性は実に多くの複雑な「萌え」ポイントをもっていることを教わり、同時に「男を愛でる」視線によって撮られた写真が当たり前になる時代を予感するようになった。(12)

他にも、『萌え男子がたり』や『恋する男子パーツ』といった本の登場にもその傾向がうかがえる。『萌え男子がたり』は女性漫画家が男性の細かな愛好ポイントを語る書籍で、例えば「一重まぶた」「男性の腕まくりした腕」など《パーツ》への愛を語る文章が登場し、『恋する男子パーツ』はその名の通り、パーツに注目した写真を掲載している書籍であり(13)、「カップを持つ手」や「ご飯を食べるときの唇」といった細かな設定が写真に付され、女性の複雑なパーツ嗜好の一端を見ることが出来る。

藤本純子は、女性向けメディアにおける「メガネ男子」「ひげ男子」といった嗜好語彙の現れなどから、「女性たちの男性「部位」へ向かう欲望は、着実にマーケット化を推し進めつつある」ことを指摘している(14)。藤本は同論考の中で女性が性的他者に向けるまなざしの変化を「フェティシズム」と絡めて考察しているが、「女性たちの男性「部位」へ向かう欲望」を「フェティシズム」的嗜好と直接結び付けることが出来るとは考えていな

(14) 藤本「第十三章 「やおい」の男性表象にみる女性の欲望の現在」、393頁。

いと述べている。しかし私は、「女性たちの男性「部位」へ向かう欲望」が深化したかたちが女性誌にも現れている（「パンツ嗜好」であると考えており、「パンツ嗜好」は「フェティシズム」的嗜好と通じる部分があると推測している）。

ここでの「フェティシズム」は、「性的フェティシズム」のことであり、一般的には、藤本が述べるように「おもに異性の特定身体部位またはその周辺に向けられる、偏執的な性的欲望」⁽¹⁵⁾を意味する言葉である。また、鷺田清一が「脚フェチとか靴フェチなどと呼ばれる（なぜか男に集中する）奇妙な性癖」⁽¹⁶⁾と述べているように、多くは男性に現れる嗜好であると考えられてきた。

その理由の一つとして、フロイトがフェティッシュを去勢不安と結びつけて論じたことが挙げられる。フロイトは、男性が「女性がペニスを持たないことを知覚したのに、その知覚という事実を拒んだ」ことで、普通は知覚した段階で断念されるはずのペニスを消滅から守る、女性のファルスの代替物としてフェティッシュが機能していると述べている⁽¹⁷⁾。去勢不安は一般的に男児に特有のものであるとされているため、この考えを適用させた場合、女性はフェティシズム的嗜好を持たないこととなる。

二つ目の理由としては、第1節でも述べてきたように、歴史的に女性は〈見られる〉立場、男性は〈見る〉立場であったという立場の違いが挙げられる。男性から性的に〈見られる〉対象とされてきた女性が、〈見る〉ことに焦点を当てた嗜好を自覚的に持ち得たとは考えにくい。こうした理由から、女性とフェティシズムの嗜好の関係はあまり論じられてこなかったが、

たとえば『フェティシズム研究 第3巻』において、複数の著者がフロイト流の考え方に疑念を抱き、女性とフェティシズムの関係を論じようと試みている。田中雅一は、男性と比べて女性の蒐集家は圧倒的に少ないが、それは「蒐集を可能にする財力や行動力が男性に有利に働いてきたから」であると述べ、フロイト流の考え方が女性のフェティシストが存在しない根拠にはならないと述べる⁽¹⁸⁾。しかし田中は、女性における下着などの蒐集は、蒐集物そのものの持つ意味に興奮、執着しているわけではなく、それを身に着けた自分自身を男性に欲望してもらいたいという手段であり、その点で男性のフェティシズムとは異なることも述べている。田中は女性の蒐集や美容整形なども確かに身体を断片化するまなざしが認められる点でフェティシズムに通ずるかもしれないが、それは他者を切断したいという欲望ではなく、男性の切断の欲望を女性が受け入れて内面化し、その欲望に応える「自身のフェティッシュ化」に過ぎないと指摘する。彼は、そこに女性の性的能動性は認められないのではないかと言うのである⁽¹⁹⁾。

藤本も、少年愛マンガとボーイズラブにおける男性表現の検証から女性の欲望の現在のあり方を論じる中で田中と似た見解を示している。それらのマンガの性的な表現のなかで女性役の男性を描く際に身体部位、とくに男女に共有の部位へ焦点が当てられ、キャラクターの身体と読者女性の身体とが重なるような表現を取ること、「同様の興奮を女性である読者に迫体験させる一種のシステム」⁽²⁰⁾が作動していると述べる。つまり、ここでは女性たちはキャラクターを一種の自己像として捉え、同一化している⁽²¹⁾。そのため、今述べたような「身体部位の焦点化」も、結局は男性に

⁽¹⁵⁾ 同書、393頁。

⁽¹⁶⁾ 鷺田『てつがくを着て、まちを歩こう』、107頁。

⁽¹⁷⁾ フロイト「フェティシズム」、312頁。

⁽¹⁸⁾ 田中「序章 侵犯する身体と切断するまなざし」、26・27頁。

⁽¹⁹⁾ 同書、27・28頁。

⁽²⁰⁾ 藤本「第13章 「やおい」の男性表象にみる女性の欲望の現在」、405頁。

⁽²¹⁾ 同書、405・406頁。

欲望されるために自己を対象化するというナルシズム的欲望なのではないかと藤本は主張する⁽²²⁾。このように、女性が純粋に男性の身体を欲望の対象として「見る」ことのなかに、主體的なフェティシズムの要素を認めることが可能であるという主張はまだなされていない。

しかし、第2節に挙げたような近年の女性誌における「パーツ化」現象や宮本が実感する「パーツ嗜好」は所謂男性的なフェティシズムの嗜好と似た部分があるように考えられる。それらは、男性の欲望を受け入れるための自己のフェティシシユ化とは決して言えない。そこに見られるのは、男性を純粋に欲望の対象として「断片化」していく女性のまなざしなのではないか。

ただし、そこには男性的なフェティシズムとは似て異なる特徴もあると考えられる。次節では、女性誌における「パーツ嗜好」が、どのような点で男性を純粋に欲望の対象として「断片化」した結果であると考えられるのか、具体的に述べていく。

前述のとおり、田中・藤本は女性とフェティシズムの嗜好を直接結びつけて考えるまでは至っていないと述べている。しかし、女性が自己をフェティシシユ化するのではなく、男性を性的他者として対象化・フェティシシユ化していくことはあり得ることであり、この先論じられていく可能性が高いとも述べている。田中は、現代において「女性の男性身体についての視点やそれを表現するメディアの創出」やそこへのアクセスが容易になったことで、「幼児体験とは切り離されたところで、性的な領域での男女間の差がなくなり女性の欲望もまたフェティシシユ化（広い意味での男性化）している」という見方が今後可能になるかもしれないと述べる⁽²³⁾。藤本は、ボーイズラブマンガにおいて、女性が自己同一化しやすい中性的で美しい男性で

はなく、筋肉質であったり、ヒゲが生えていたりリアルな男性性を備えた男性表象が増加し、男性イメージのリアル化が起こっていることを指摘している。こうした男性表象は身体的な「性的他者」をより可視的にし、女性が男性を「性的他者」として消費する糸口になり得ると藤本は主張する⁽²⁴⁾。本稿で扱う女性誌における男性表象が示す特徴は、彼らが論じた先にある、「男性を純粋に対象化し、消費する女性」を示すもののではないかと考えられる。

4、「パーツ嗜好」に見る女性による男性の純粋な対象化

ここからは、女性誌における男性身体（「パーツ嗜好」が、どのような点で男性を純粋に欲望の対象として、「断片化」する女性のまなざしを表わしているのかを具体的に論じていく。

まず、第2、第3節で触れた、女性の多種多様な複雑なパーツへの嗜好がそうした女性のまなざしを表していると考えられる。第1節でも述べたとおり、女性誌に掲載される男性パーツの表象は非常に多種多様である。加えて、「ちようどいいバランスのくちびる」「キュッとしまったアキレス腱」のように、「各パーツのなかでも更に細かな特定のポイントに焦点を当てて選んだパーツ」が掲載される場合も多々あり、複雑な嗜好が見られる。一般的に男性が女性に対して抱くとされるフェティシシズムにおいては、例えば鷺田清一が述べるように、「フェティシストの嗜好は髪や脚、ハンカチやストッキングや靴というふうに、身体の末端や装身具に向かう」⁽²⁵⁾。ことが多

⁽²²⁾ 同書、406頁。

⁽²³⁾ 田中「序章 侵犯する身体と切断するまなざし」、30頁。

⁽²⁴⁾ 藤本「第13章 「やおい」の男性表象にみる女性の欲望の現在」、408

頁。

⁽²⁵⁾ 鷺田『てつがくを着て、まちを歩こう』、107・108頁。

い。フロイトは、男性が女性のファルスの欠如を目撃した際に、それを補うために横にあった足や脚・靴、目撃の直前に目にするものである下着に、男性のフェティッシュが集中するのだと述べている⁽²⁶⁾。田中は下着にフェティッシュが集中する理由として、下着は乳房や性器などの主要な性感帯を覆うため、性行為を喚起しやすいからであると述べる⁽²⁷⁾。鷺田も、「どうにもうまく制御できない他者との不安定な関係を一方的に遮断し、現実の他者ではなく、その身体の一部や、さらにその延長物としての装身具や転移させられた架空の他者との私秘的で閉じられた関係のなかに埋没してしまふこと」⁽²⁸⁾をフェティズムの特質として挙げている。

細かい点は他にもあろうが、このように、大まかに一般的な男性のフェティズムの傾向を見ていくと、フェティッシュなものは女性との性的行為や女性性器へ向かう欲望の代替物として働いていることが読み取れる。言いかえれば、実際の女性や女性性器に向けることの出来ない性的欲望を分散させる役割を担っているということである。つまり、ここでのフェティッシュなものは、女性との性的行為へ向かう欲望を実際の行為なしに満足させるためのものであり、それを喚起させやすい身体部分が選択されていると考えられる。そのため、多くの場合欲望される身体部分は限定され、ワンパターン化されている。

これと比較すると、女性誌に見られる男性身体の〈パーツ嗜好〉においては、もちろん登場回数が多い部位・少ない部位といった割合のばらつきはあるが、一般的な男性のフェティッシュの場合のようにワンパターン化されてはいないのである。そのため、〈パーツ嗜好〉は、男性との性的な行為を喚起させ、それを欲望することの代替物として働いているとは考えづらい。

⁽²⁶⁾フロイト「フェティズム」、315頁。

⁽²⁷⁾田中「第十章 ランジェリー幻想——官能小説と盗撮、格子写真」、31

こうした点において、女性の〈パーツ嗜好〉は一般的な男性のフェティズムとは異なるかたちの欲望を表わしていると考えられる。

また、同時に女性の〈パーツ嗜好〉は第3節で触れた、女性が男性に欲望されるために自己をフェティッシュ化するというナルシズム的な欲望とも異なる欲望を表すものではないかと考えられる。例えば、女性誌では

(例⑫)「割れた腹筋も、たくましい腕も。神話から出てきたような完璧ボディに見とれて♡」(ときめきが止まらない!美男子のマジ色気がスゴい♡the4 宮崎秋人)『JUNON』2016年8月号、31頁)の「たくましい腕」や、

(例⑬)「グイッと上を向いて飲むときの、きれいなフェイスラインと男らしいのど仏。」(イケメン×飲む姿が起す化学反応——飲む男。scene:片瀬涼太&佐野玲於)『CanCam』2019年5月号、211頁)

の「男らしいのど仏」などのパーツが取り上げられることがある。これらのパーツは、一般的に考えれば女性身体と共通または共有可能ではない部位であり、藤本が述べていたような、女性が自己を同一化して興奮を追体験する存在とは考えづらい。また、自己と重ねられない部位が多く登場するということは、男性の切断の欲望を内面化することには繋がらないのではないかと考えられる。

以上の点を踏まえると、多種多様で複雑な〈パーツ嗜好〉は女性が男性との性的行為を想像・喚起するための代替物でもなく、男性の切断の欲望を内面化し、男性に欲望されるために自己をフェティッシュ化するというナルシズム的な欲望でもないということになる。つまり、女性は自分が〈見たい〉と思うかたちで男性を〈見る〉対象として客体化し、まなざしの快楽を

0頁。

⁽²⁸⁾鷺田『モードの迷宮』、157頁。

獲得するための一つの方法として「断片化」を選択しているのではないかと考えられるのだ。ここでの女性は主體的な存在として捉えられ、〈パーツ嗜好〉は断片化によって純粹に男性を〈見る〉対象とし、男性を〈消費〉していく女性の欲望を表している。

次に、「断片化」をする際の切断によって生まれる身体の「際（きわ）」の誘惑がある。これは一般的な男性のフェティシズムと似た部分であると考えられる。鷺田清一は、「際」について、自分の身体とその外縁部分の境界線、つまり身体の「際」が「わたし」がもはや「わたし」でなくなりかけることで「意味が充満していく」場所であると述べている⁽²⁹⁾。身体を想像上で切断することによって、体の表面にも「際」と同じ効果を持つ「切れ目」を作り出すことで、身体という存在の可視性の表面を「さわがしく揺り動かす」。また「さわめき」を作り出すことで、新しい意味作用を作り出し、増殖させるのだという⁽³⁰⁾。こうした「切れ目」の生み出す意味作用が、「人間のもっと深くおどろおどろしい欲望を巧妙に処理している」から身体の切断にはエロティックな誘惑する力があるのではないかと鷺田は推測している⁽³¹⁾。田中も切断と誘惑の関係について述べている。田中によると、身体は「欲望の対象」でもあり、「誘惑の主体」でもあるので、「わたし」のフェティッシュな欲望は、〈あなた〉の全人格的な（と想定される）身体を切り刻み、その一部に欲望する。しかし、〈あなた〉の身体は、切断されると同時に、いやそのような欲望を喚起するという意味で、切断される以前に侵犯する身体として外在化する⁽³²⁾の。また、今述べたふたりよりも前に、ロマン・ヤコブソンが「言語の二

つの面と失語症の二つのタイプ」において写実主義と身体部分による換喩の関係を論じている部分で、直接的ではないが、切断とその「際」から対象をはつきりと捉えることについて述べている。

写実主義の作家は、隣接的関係をたどっていき、すじから雰囲気へ、人物から空間的・時間的な背景へと、換喩的に離脱していく。彼は提喩（サイネクドク）的な詳細を好む。アンナ・カレーニナの自殺の場面で、トルストイの芸術的関心は女主人公のハンドバッグに集中している。『戦争と平和』では、「上唇の上の毛」とか「あらわな肩」などの提喩が、これらの特性をもった女性の人物の代りとなるものとして、同じ作家によって使われている。⁽³³⁾

ピーター・ブルックスは、このヤコブソンの論を「際」の効果に触れたものとして次のように説明する。

それは、換喩が、細部——近接性をとおして集められた断片——を使って、間然するところのない世界——主観性と欲望が常に物の世界に触れてその明確な輪郭を浮かび上がらせる、そういった世界——という効果を醸し出すからだ。⁽³⁴⁾

つまり、身体の切断は、私たちが日常的に認識し、見ている身体という存在の表面に「際」を作り出し、通常と違う新しい意味、「さわめき」を喚起す

⁽²⁹⁾ 鷺田『モードの迷宮』156頁。

⁽³⁰⁾ 同書、86・94頁。

⁽³¹⁾ 鷺田『てがつくを着て、まちを歩こう。』105頁。

⁽³²⁾ 田中「序章 侵犯する身体と切断するまなざし」、24・26頁。

⁽³³⁾ ヤコブソン「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」、40・41頁。

⁽³⁴⁾ ブルックス『肉体作品——近代の語りにおける欲望の対象』、145頁。

るものである。そして、その喚起によって不確かなラインで成立するような危うい魅力を生み出し、その縁の部分攻める欲望によってそれまでよりもその身体の輪郭をよりはっきりとさせるものである。なおかつその「際」は、その魅力によってそれを見ている、消費している側の人を吸い寄せ、引き寄せてしまう効果を持つものだということが言える。

（パーツ嗜好）の元となる（パーツ化）はまさに身体の切断そのものであり、この効果を示すものであると考えられる。つまり、男性芸能人を身体の切断によって（パーツ化）することで、女性誌の読者が普段読面や他所で見ている彼らの身体という「可視性の表面」に揺らぎが起る。この揺らぎにより、普段見ている可視的な身体ではない別の部分へ視線が吸い寄せられることで、新しい魅力を発見することが出来るという効果をもたらす。また、彼らの身体なのか、彼らの身体ではないのかわからない「際」を強く意識すること、その際どい危うさに怪しげな魅力を感じることが出来るという効果をもたらす。また、（パーツ化）によって「際」を強く意識することで、普段見ている対象の男性芸能人の身体の輪郭をより一層はっきりと認識し、より対象を魅力的に思うことが出来るという効果もあるのではないか。こうした効果は、女性が男性を（見る）対象として意識しているからこそ発揮されるものであり、ここにも断片化によって男性を欲望の対象として（消費）していく女性の姿を見ることが出来る。

ここで少し実際の例を用いて分析してみたい。例えば、第2節で登場した（例⑥）【図3】の北村匠海の（唇）（足）だけを切り取ったショットでは、読者は普段よりも強くそれらのパーツを意識することを促されることで、それらの部位の新しい魅力を発見できる。加えて、（北村）と（北村ではない（輪郭の）外部）の際の部分の危うさに視線が吸い寄せられ魅了されるのである。また、（唇）（足）を見た後に、前後のページの全身ショットを見ると北村の身体の輪郭をよりはっきりと捉えることが出来て、一層彼の姿に

魅力を感じることが出来るのではないか。また例えば、（例⑦）【図4】の佐藤健も、（口元）や（手）が顔全体+手の一般的なアップショットの周辺に配置されることで、読者はパーツ自体を強く意識するとともに、アップショットにおいてもそれらのパーツを普段より強く意識し、新しい魅力の発見に繋がる可能性がある。また、パーツが切り取られている「際」と（佐藤の身体）の切れ目に危うい「揺らぎ」に視線が吸い寄せられ魅了されるのである。

また、「際」の誘惑にはもう一つ効果があると考えられる。それは、パーソナリティの希薄化である。つまり、男性を身体の切断によって（パーツ化）することで、表面上のパーソナリティが希薄化するために、相手をこっそりと、しかしじっくりと見ることが出来る。そのため、「可視性の表面」の揺らぎが起り、危うい魅力を感じることが出来るという効果を生み出しているのではないか。つまり「際」の誘惑は、（普段は良く見られないものをじっくり見て楽しみたい）という女性の欲望を反映するとともに、深い部分で渦巻く欲望を処理しているのではないか。

ここでも少し例を上げて分析をしてみよう。例えば、同じく第2節で登場した（例④）【図2】の岩田剛典の例では、こちらに視線を向けている岩田の写真とともに、（手）や（輪郭）などの（パーツ）の写真も掲載されている。この例では、こちらが（相手に）見られているという意識は読者のなかにあるが、普段はまじまじと見られない部分は（パーツ化）によってパーソナリティが希薄化しているのである。そうしたパーソナリティの希薄化によって、普段はまじまじとは見られない部分をじっくり観察できるという状況に危うい魅力を感じるという効果が生まれていると考えられる。この効果も、女性が男性を純粋に（見る）欲望の対象として扱っているからこそ生まれる効果ではないかと考えられる。

今述べてきたように、（パーツ嗜好）の女性のまなざしには、「際」の誘惑

によるパーソナリティの希薄化という効果が働いていると考えられるが、一般的な男性のフェティシズムにおいては、対象となるパーツは、持ち主のパーソナリティとは完全に切り離されたものとして扱われる。田中が述べるように、「その部位を一部とする（あなた）の身体をひとつのまとまりとしては見てはいない。それは、すでに（あなた）の身体から「切断」されているからである。フェティッシュな欲望の前で、（あなた）（の身体）はもう（あなた）ではなく、部位の集合の一つでしかない」⁽³⁵⁾のである。加えて田中は、フェティシストにとってその対象の固有性を保証する物語は否定されるものだということも述べている⁽³⁶⁾。女性誌に見られる（パーツ嗜好）に現れるのはあくまで（希薄化）であり、パーソナリティを完全に無化する男性のフェティシズムの在り方とは異なるものであると考えられる。なぜなら、例えば第2節で挙げた（例⑨）梶裕貴の例では、それぞれの（パーツ）写真は梶からは独立してはいるが、「さあ、梶くんのパーツ」を凝視しちやつてください♡とあるように、あくまでまなざしの対象とするのは「梶くんのパーツ」であることが重視されているのである。また、（例⑪）【図6】の企画では「タオルが似合う首部門 松坂桃李」であったり、「指きりげんまんが似合う小指部門」「扇子を握る手部門」「線香花火をつまんでいる指先部門」はすべて岡田将生が受賞していたりと、その（パーツ）の持ち主が誰であるのかということが重視されている。そのため、（パーツ嗜好）においては対象の男性芸能人ありきの消費であることがわかる。こうした点においては、（パーツ嗜好）と一般的な男性のフェティシズムには違いがあるということがわかる。

⁽³⁶⁾ 田中「序章 侵犯する身体と切断するまなざし」、24頁。

5、文章としての（パーツ嗜好）

ここまでは主に女性誌の写真や単語を取り上げて（パーツ嗜好）の分析をしてきたが、女性誌の記事におけるキャプションにおいても（パーツ嗜好）が現れている部分がある。

（例⑭）「りそうのおとこ、成田凌 ねぎま男子」『Vivi』2017年5月号、238・240頁【図7】

ここで言う「ねぎま男子」とは、「草食系とか肉食系とか。イヌ派とかネコ派とか」という二択で表現されるような正反対の魅力を両方兼ね備えた男性のことを、野菜も肉も楽しめる焼き鳥の「ねぎま」に例えた言葉である。本記事ではそれを特に体現する存在として俳優・成田凌が取り上げられている。そのなかで、成

田の身体的なチャームポイントの一つに絞れない様子を「まっげと唇のねぎま」と表現している。

（例⑮）「ひとりじめしたい横顔×横浜流星」「板垣瑞生×無防備な横顔」「横顔が美しい人こそ、真のイケメン！ オトコの横顔」『CanCam』20



【図7】（例⑭）

⁽³⁶⁾ 同書、24頁。

19年3月号、157・169頁)

これは、男性芸能人の「横顔」を特集した記事である。横浜であれば「鼻筋の通った高い鼻にシュツとしたあごのライン、くるんと上がったまつげ」(166頁)、板垣であれば「オトコらしいフェイスラインに、のど仏」(169頁)というように、ただ「横顔」を並べるだけではなく、その「横顔」のなかでも特徴的なパーツについて細かく言及しているのが印象的である。「パーツ嗜好」の多種多様なパーツへの嗜好が文章にも現れていることをよく表す例である。

(例⑬) 「キス顔×壁ドン! 小林豊 (BOYS AND MEN) ぷるんとしたアヒル口が、色つぼすぎてもうメロメロ!」間接キス×壁ドン! 宮崎秋人 柔らかな唇が触れたカップ、いただきます♡」(ほぼ実物大でお届け! 壁ドン♡ ザ・ファイナル」『JUNON』2015年4月号、20・49頁)

これは、「壁ドン」⁽³⁷⁾をしている男性芸能人を特集している記事である。小林は「極上のアヒル口」、宮崎は「理性的な唇」など、同じ唇においても全く別の表現がなされており、対象によるパーツの特徴の細かな差に関しても興味を持つ女性が多いと考えられる。こうした非常に詳細な記述は対象の姿をはっきりと浮かび上がらせる効果を生み出すと考えられ、女性と共有可能である部位であつてもやはり藤本が述べるように自己同一化の対象として扱われているとは考えづらいであろう。

以上のように、女性誌におけるキャプションにおいても「パーツ化」の視点が多く用いられており、文章としても「パーツ嗜好」を確認することが出来る。これらも、前節までに述べてきたような効果を生むことで、男性を純粹に欲望の対象とする女性のまなざしを表すと考えられる。

⁽³⁷⁾ 壁ドンとは、「壁を背にした相手の正面に立ち、相手の背後の壁に手を置いて、立ちはだかるさまを表す語」のことである。「実用日本語表現辞典」

6. 同観点における男性誌との比較

最後に、今まで女性誌を論じてきた観点で男性誌を見ると、どのように見えるのか、つまり男性誌の女性表象における「パーツ化」はどういった様相であるのかについて少しだけ論じたい。これまで女性向け芸能誌と女性ファッション誌を取り上げてきたので、ここでは同様に男性向け芸能誌と男性ファッション誌を取り上げる。

(例⑭) 『未来とは?』SKE48 sideA 木崎ゆりあ キミと過す一瞬一秒」『BOMB』2014年4月号、3・12頁)

制服を着ているショツトが散りばめられる。靴下を履く足だけのショツト、ネクタイを締める胸元だけのショツトなどが掲載されている。

(例⑮) 「朝倉樹々(つばきファクトリー) 素足の季節」『アップトウボーイ』2019年7月号、22・30頁)

こちらも学校をテーマにした記事であり、砂浜で砂の上を歩く脚と足のみの写真が掲載されている。

(例⑯) 「PHOTO STORY ぼくとキミの距離について」『齋藤飛鳥 BOOK 二十歳の素顔。』『MEN'S NON-NO』2018年11月号別冊、8頁)

フォトストーリーのなかのお風呂場で洗濯をしているシーンで、椅子に座った膝下の脚だけを映した写真を掲載。

このように、男性誌における女性表象の「パーツ」は圧倒的に足(脚)や胸元が多い。また、後で述べる(例⑳㉑)のような例を除き、パーツとそれを所持する対象の女性芸能人の関係に関する言及がほとんどない。これは

(『weblio 辞書』<http://www.practical-japanese.com/>) (2020年8月27日)

前節までに述べてきた男性的なフェティシズムの特徴と繋がる部分があるように見える。例えば、鷺田や田中が述べていた、男性のフェティシズムが装身具や末端や、性的欲望を喚起しやすい部分へ向かうという特徴である。パーツが誰のものであるのかに執着しない傾向は、フェティシズムにおいてパーツが持ち主のパーソナリティと完全に切り離されることに似ている。ただし、男性誌においては、女性誌同様、読者が特定の芸能人を目当てとして雑誌を購入する場合もあると考えられ、男性的フェティシズムと完全に重なるわけではないだろう。しかし、傾向としてはそれに近いものがあり、女性誌とは決定的に異なっていることがわかる。

また、女性誌のように様々なパーツを扱った記事も少ないが登場する。

(例②)「もちのカラダ」(「Berryz工房 嗣永桃子 ももち調べます」『BOMB』2014年7月号、94頁)

嗣永の身体を「髪」「おしり」などパーツ化しているような表現がされているが、写真は全身のみで、吹き出しでパーツの説明が付けられている。

(例③)「BODY CHECK」(「板野友美 僕たちのスキなともしん!!」『BOMB』2012年4月号、19頁)

こちらもあり、全身の写真の横に「目」「鼻」「ヒップ」「ウエスト」「バスト」といったキャプションが付けられている。

こうした記事も、女性誌のようにパーツを断片化した写真はなく、全身写真に説明が加えられるのみである。また、他の例よりは扱われるパーツが多いとはいえ、オーソドックスなものや「バスト」「おしり」といった性的欲望を喚起させやすい部位が多く、やはり女性誌とは異なっていることがわかる。

7、結論

本稿では、女性が男性にまなざしを向け、客体化するようになった現代において、そのまなざしがどのような欲望を表しているのかを「パーツ嗜好」という観点から考察してきた。この嗜好は一般的な男性のフェティシズムの特徴と似ている部分もあるが、異なる特徴も複数存在し、女性とパーツというまだ深く論じられていない関係性の端緒を見ることができたと考えられる。また、この嗜好は、女性が男性から「欲望される」まなざしを内面化することなく、男性を断片化することで、自分が「見たい」と思ふかたちで男性を客体化し、新しい魅力の発見や際どい危うさに魅了されたいという純粋な欲望を示しているのではないかと考えられる。そこから見えてくるのは、今まで置かれてきた「見られる」立場から踏み出し、主体的に自分の欲望を満たしていくたくましい女性の姿である。

〈参考文献一覧〉

池田忍『日本絵画の女性像——ジェンダー美術史の視点から』、筑摩書房、1998年。

伊藤公雄『「男らしさ」のゆくえ』、新曜社、1993年。

井上善友「差別広告」、『広告からよむ女と男——ジェンダーとセクシュアリティ』、石川弘義・滝嶋英雄編、雄山閣出版、2000年、127-157頁。

『実用日本語表現辞典』(「weblio 辞書」)〈<http://www.practical-japanese.com/>〉(8月27日閲覧)

高旗弘之編『恋する男子パーツ』、エンターブレイン、2010年。

田中雅一「侵犯する身体と切断するまなざし」、『フェティシズム研究 第3

巻 侵犯する身体』、田中雅一編、京都大学学術出版会、2017年、3・45頁。

——『ランジェリー幻想——官能小説と盗撮、格子写真』、『フェティシズム研究 第3巻 侵犯する身体』、309・334頁。

千葉雅也「イケメンであるとされるということ」、『ユリイカ 特集イケメン・スタディーズ』、2014年9月増刊号、青土社、8・9頁。

辻泉「男性アイドル雑誌の地政学」、『ユリイカ 特集日本の男性アイドル』、2019年11月増刊号、青土社、58・66頁。

成実弘至「文化フェティシズムと欲望される身体」、『フェティシズム研究 第3巻 侵犯する身体』、275・279頁。

藤本純子「やおい」の男性表象にみる女性の欲望の現在』、『フェティシズム研究 第3巻 侵犯する身体』、393・411頁。

ブルックス、ピーター『肉体作品——近代の語りにおける欲望の対象』、高田茂樹訳、新曜社、2003年。

フロイト、ジークムント『フェティシズム』、『フロイト全集 第19巻』、石田雄一訳、岩波書店、2010年、275・282頁。

マルヴィ、ローラ「視覚的快楽と物語映画」、『新「映画理論集成1」、斉藤綾子訳、フィルムアート社、1998年、126・141頁。

宮本和英「美少年写真はどこへ向かうか?」、『芸術新潮』、2017年1月号、新潮社、58・67頁。

ヤーコブソン、ロマーン「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」、『一般言語学』、川本茂雄・田村すゑ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子訳、みすず書房、1973年。

山口美生ほか編『萌え男子がたり』、ブックマン社、2009年。

鷺田清一『てつがくを着て、まちを歩こう。——ファッション考現学』、筑摩書房、2006年。

——『モードの迷宮』、筑摩書房、1996年。

〈雑誌資料〉

『アップトゥボーイ』、2019年7月号、ワニブックス。

『VIVA』、1989年6月号、2017年5月号〜2018年4月号、講談社。

『CanCan』、1989年12月号、2018年3月号〜2019年7月号、小学館。

『JUNON』、1990年1月号、2011年7月号〜2016年9月号、主婦と生活社。

『BOMB』、2012年4月号〜2014年7月号、学研プラス。

『MEN'S NON-NO』、2018年11月号、集英社。